

目 次

まえがき

第 I 部 初期理論から障壁理論まで

本田謙介・田中江扶・畠山雄二

第 1 章	はじめに	2
第 2 章	句構造規則 —言語の設計図—	5
第 3 章	構成素 —言語の基本単位—	11
第 4 章	拡大投射原理 —主語はなぜ必要か—	15
第 5 章	境界理論 —越えられる壁・越えられない壁—	18
5.1	標準理論	18
5.2	拡大標準理論	20
5.3	Barriers	23
第 6 章	痕跡理論 —痕跡から見える真実—	27

第7章	移動変形規則	
	—move- α への道—	32
第8章	サイクル	
	—規則は循環する—	40
第9章	日英比較統語論	
	—統語理論が日英語を斬る—	45
9.1	初期理論	45
9.2	標準理論から拡大標準理論	48
9.3	GB理論	50
第10章	おわりに	54

第II部 経済性理論から極小主義まで

藤田 耕司

第1章	はじめに	58
第2章	原理・パラメータモデルの問題点	
	—豊かすぎた普遍文法—	60
2.1	比較統語論の発展	60
2.2	主要部パラメータ	61
2.3	パラメータに対する制限	63
2.4	新たな問題点	64
第3章	派生と表示の経済性	
	—諸原理の統合へ—	66
3.1	統合概念としての極小性	66
3.2	派生の経済性と表示の経済性	68
3.3	派生の経済性の原理	70

3.4	比較対象の制限	72
3.5	大域経済性から局所経済性へ	73
第4章 併合と移動		
	—最終手段としての移動操作—	74
4.1	併合が移動に優先する—Merge over Move (MoM)	74
4.2	MoMの問題点	76
4.3	MoMの破棄	78
第5章 α 併合		
	—併合の完全自由適用—	80
5.1	「転位」と移動	80
5.2	内的併合としての移動	81
5.3	外的併合と内的併合の役割分担	82
5.4	思考とコミュニケーション	84
5.5	α 併合と「第三要因」	84
第6章 最小句構造理論		
	— X' 理論とD構造の破棄—	86
6.1	X' 理論から併合理論へ	86
6.2	最小句構造理論の進展	88
6.3	語彙中心主義からの脱却	90
第7章 ラベル理論		
	—最小探索によるラベル決定—	93
7.1	ラベル理論(1) —併合の一部としてのラベルづけ	93
7.2	ラベル理論(2) —最小探索によるラベルづけ	95
7.3	補助仮説の必要性	96
7.4	複合語の問題	97
第8章 フェイズ単位の派生		
	—演算効率と局所性—	100
8.1	多重転送とフェイズ不可侵条件	100

8.2	フェイズ理論の問題点	102
8.3	統語操作の局所性と PIC	102
8.4	ラベル理論との関係	104
8.5	連続循環性の見直し	105
第9章	インターフェイスの非対称性	
	—内在化と外在化—	107
9.1	線形化と形態音韻解釈の問題	107
9.2	思考・コミュニケーションと言語進化	109
9.3	線形文法と階層文法	110
9.4	文化進化	112
第10章	おわりに	113

第 III 部 認知言語学

酒井 智宏

第1章	はじめに	116
第2章	アメリカ構造主義	
	—「心」と「意味」の喪失—	121
第3章	チョムスキー革命	
	—「心」の回復—	126
第4章	生成意味論	
	—「意味」の回復?—	131
第5章	言語学戦争	
	—「意味」の喪失?—	136

第6章	認知意味論 (1)	
	—アップデートされた生成意味論—	141
第7章	認知意味論 (2)	
	—シンプルからサンプルへ—	146
第8章	認知文法 (1)	
	—記号としての文法—	151
第9章	認知文法 (2)	
	—捉え方—	156
第10章	おわりに	161

第IV部 形式意味論

藏藤 健雄

第1章	はじめに	168
第2章	自然言語の形式化	
	—モンタギューの企て—	170
2.1	形式化とは	170
2.2	PTQの概要	172
2.3	まとめ	173
第3章	可能世界意味論	
	—「いま、ここ」以外の世界—	175
3.1	可能世界と内包性	175
3.2	PTQでのタイプと内包	176
3.3	二分類タイプ理論	177
3.4	可能世界変項に対する「束縛理論」	178

第4章	タイプ変換	
	—形式意味論での「変形」—	181
4.1	等位接続とタイプ上昇	181
4.2	タイプ変換	184
4.3	意味論における名詞化	185
4.4	タイプ変換の制限	187
第5章	数量詞の作用域	
	—構造と解釈のミスマッチ—	189
5.1	割り込み量化のアプローチ	189
5.2	数量詞保管のアプローチ	191
5.3	タイプ変換のアプローチ	192
5.4	現在の状況	192
第6章	疑問文の意味論	
	—返答の形式化—	194
6.1	可能な返答の集合としての疑問文	194
6.2	真の返答の集合としての疑問文	195
6.3	可能世界の集合の分割としての疑問文	196
6.4	分割アプローチ以降	198
第7章	談話意味論 (1)	
	—文を超えた照応—	199
7.1	数量詞の作用域と代名詞の解釈	199
7.2	E型アプローチ	201
7.3	動的アプローチ	202
7.3.1	表示による理論	202
7.3.2	ファイル変化意味論	204
7.3.3	動的述語論理	207
第8章	談話意味論 (2)	
	—「ロバ文」を巡る攻防—	209
8.1	動的アプローチによる解決案	210

8.2	E型アプローチによる解決案	211
8.3	その他のロバ文解釈	213
第9章	英語以外の言語からの貢献	
	—形式化の普遍性を求めて—	214
9.1	作用域マーキング	214
9.2	数量詞のタイプ	216
9.3	意味論のパラメータ	218
第10章	おわりに	220

第V部 生物言語学

尾島 司郎

第1章	はじめに	224
第2章	生物言語学の誕生	
	—進化論, 失語症, 生成文法, 統合—	226
2.1	進化論の誕生	226
2.2	古典的失語症研究	227
2.3	生成文法の誕生	228
2.4	はじめての統合	230
第3章	言語獲得の生物学的条件	
	—臨界期—	231
3.1	子どもの母語獲得	231
3.2	母語獲得の臨界期	232
3.3	動物に言語が学べるか	233
3.4	動物に単語が学べるか	234

第4章	言語起源論	
	—突然変異, 原型言語, 自然選択—	236
4.1	原理とパラメータ理論	236
4.2	言語起源論	237
4.3	原型言語から言語へ	238
4.4	自然選択による言語進化	239
第5章	言語脳科学の誕生	
	—言語学を脳科学に応用する—	241
5.1	非侵襲的脳機能計測の幕開け: ERP	241
5.2	fMRI による脳地図づくり	242
5.3	理論言語学の脳科学への応用	243
第6章	言語の障害と言語の天才	
	—言語関連遺伝子はあるか—	246
6.1	言語能力と障害の継承	246
6.2	特定言語障害と KE 家	247
6.3	ウィリアムズ症候群と言語の天才	248
第7章	動物研究の貢献	
	—鳥の歌との類似性—	250
7.1	チョムスキー階層の応用	250
7.2	歌文法と言語の歌起源説	251
7.3	鳥にことばがしゃべれるか	253
第8章	極小主義的な言語起源論	
	—回帰のみ仮説—	256
8.1	回帰のみ仮説	256
8.2	極小主義プログラマ的な言語起源論	257
8.3	回帰のみ仮説を越えて	259

第9章 言語脳科学の発展	
—脳における人間言語らしさ—	261
9.1 脳機能計測研究の多様化	261
9.2 人間言語らしさを脳内に求める	263
9.3 脳内基盤の進化	265
第10章 おわりに	266
参考文献	269
索引	291
執筆者紹介	301
編者紹介	303